

発表者

遠藤俊介氏

ご質問①

○評価後に評価が変化することがありますか？

ご回答①

ご質問ありがとうございます。

あるお子さんが文多様性評価で「言語発達障害のリスクがある」と判断された場合、その後その判断が変化するかどうか、という質問と解釈いたしました。

本評価法を2歳台のお子さんに使用する際、その目的は「より丁寧なフォローをしたほうがいいのか」「経過観察で良いのか」判断する一助とすることです。

文の多様性がカットオフ値を下回ったという結果が、そのお子さんの言語発達障害を確定するものではありません。

よって、例えば2歳半で文の多様性が少なかったお子さんも、そこから保護者様の丁寧な関わりやことばかけ、早期の支援開始によって、キャッチアップしてくる可能性は十分にあると思われます。

むしろ、そのための「早期評価」であると考えております。

発表者

遠藤俊介氏

ご質問②

○まさに話していただいた言語発達リスクがある子どもへの具体的支援方法を知りたい。

(ご意見) トイトーク, NPO法人どこでもこどばドアを調べます。

ご回答②

ご質問、ご意見ありがとうございます。

評価で「リスク」を検出しても、その後の支援が整っていなければ保護者を不安にさせるだけだと思えます。

発達早期の言語発達支援で重要なのは、日常的な大人の関わり方が、よりお子さんの言語発達促進に適したものになるよう、保護者に助言指導を行っていくことです。もちろん保護者のそれまでの関わり方を否定するようなものではなく、子どもの発達の遅れを心配している保護者の方に「家庭でできることがあるから、とりくんでみましょう」と具体的に前向きに提示することが大切であると考えています。

お子さんの言語発達が無発語～単語レベルの場合には「インリアル・アプローチ(*1)」が有効であると言われてしています。保護者の方に「子供に共感的かつ応答的に関わっていくこと」を指導します。さらに単語と単語を繋ぎ始めたお子さんの文をより発達させるために、「トイトーク」という方法が検討されています。詳細は下記文献(*2)をご参照ください。

(*1) 竹田契一, 里見恵子. インリアル・アプローチ-子どもとの豊かなコミュニケーションを築く. 日本文化科学社. 1994

(*2) 遠藤俊介, 田中裕美子. (2022). 日本語版トイトーク (Toy Talk) による保護者指導の効果-保護者の言葉かけの変化と子どもの文の発達に関する予備的研究-. コミュニケーション障害学. (印刷中)

発表者

遠藤俊介氏

ご質問③

○24ヶ月児に対する評価法としては、どのような内容を想定されているか 教えて頂けたらと思います。

ご回答③

ご質問ありがとうございます。

予備研究として少数例ではありますが、24ヶ月のお子さんに文の多様性評価を実施しました。その結果、24ヶ月時点では30分間の観察場面内での文の多様性は非常に少なく「文の多様性→0（名詞＋動詞の組み合わせがみられない）」というお子さんも数名いました。

24ヶ月時点ではまだ文の多様性に乏しく、観察場面でタイミングよく動態動詞文を表出することが少ないと予想されます。

よって、24ヶ月時点では、保護者に家庭での「文の多様性」について問診することが妥当ではないかと考えています。

「2語文が出ていますか?」「ことばとことばをつなげて話しますか?」という問診だけでなく、「名詞と動詞を組み合わせた文を話していますか?」と少し丁寧に確認していくことが必要ではないかと思われます。